

『ブダペスト』 または尖筆とエクリチュール

シコ・ブアルキ著・武田千香訳

『ブダペスト』

白水社 二〇〇六年

小説を読むには、あるいは敷衍して、本を読むには細心の注意が必要である。ただし、その注意力というのは、一点を凝視し、焦点の外は何も見えなくなるというタイプのものであつてはならない。ちようど車を運転するときのように、あるいは映画を観るときのように、ぼんやりとして全体をくまなく眺める、そうしたタイプの注意力が要求されているのだろう。そうすると、重要な意味を持つ要素は、たとえそれがどんな細部に思われようとも、おのずと目に飛び込んでくる。

シコ・ブアルキの小説『ブダペスト』もまた、そのようにぼんやりと眺めなければならぬ作品のひとつだ。芥子色の美しい表紙には黒地に白抜き文字で宣伝や内容紹介を書いたオビがかけられている。その中央左寄りに、両手で右膝を抱えてこちらを睨む人物がいれば、それが著者だと考えるのは当然のこと。隣には「ブラジル音楽の巨匠が奏でる言葉の魔術^{マジック}」との惹句が踊っているし、その下には小さな文字で略歴が紹介されているのだから、著者ブアルキがブラジルのポップス歌手であることもわかるというもの。

日本では彼よりも二歳年長のカエターノ・ヴェローゾの方が知られているだろうか？ ブアルキはその彼と共に長くTVの音楽番組でホストを務めたこともあるらしい。二人がアントニオ・カルロス・ジヨビン、アストル・ピアソラといった大御所とともに映っている写真を、そういえば見たことがある。その写真よりはいささか老けた観があるのは避けられない時の流れだろう。現在のブアルキがじつとこちらを見つめる写真に、私としても思わず見つめ返さずにいられない。ひとしきり睨み合うと、ぼんやり眺めるとの当初の目論見を忘れて、ともかく、扉を開いて読むことにしよう。

主人公はジョゼ・コスタ。四十歳代のゴーストライター。リオ・デ・ジャネイロ在住。ニュース・キャスターの妻との間に子供がひとり。友人と興した会社の専属で、「卒業論文や修士論文、医学試験の解答、弁護士^{ロウ}の陳情書、恋文、別れの手紙、絶望の手紙、脅迫状、自殺予告」(18)等々、とにかく、なんでも代筆している。

こうした設定から容易に引き出せるテーマは、著者性の問題だろう。そう言えばオビの裏表紙部分には書いてあったのだ。「僕はいつたい誰なのか……」。自分の書いた文章が他者の名を冠して発表されるのだ。こうした自問はゴーストライターという職業にはつきものだろう。主人公ジョゼ・コスタの一人称で語られる小説では、だいたい早い時期からこの問題が展開されている。主人公が次のように心情を吐露するのだ。

とくに選挙運動の演説は金になった、が、いつも不満が残り、惨めな気持ちになる。たいていの場合、演説者は僕が一番気に

入っている箇所でつかかるし、時間が押していたり日射しが強いと、平気で何段落もすつ飛ばす。かと思うといきなり頭に浮かんだ冗漫な文句を挟み、聴衆はそれに喝采を送り、その後、壇上から大量のビラを風に乘せて撒く。というわけで、プロとして本当に報われるのは、大手新聞に記事が全文掲載されるときだけだ。当然、僕の名前は出ない、僕はこの方ずつと日陰で生きる運命の男、だが、僕の文に冠せられる名前がどんどん著名になつていくのは刺激的で、言ってみればそれは陰の出世だった。(19)

他人の意志によつて改変されるテキスト。改竄され編集されない場合でも、その内容を権威づける人物、すなわち著者には別の名が冠される、そんな帰属関係を剥奪された言葉の紡ぎ手であるゴーストライターの意識とは、すなわち自己の分裂の危機にさらされたものであるだろう。著者性の問いがアイデンティティの問いでもあるという次第だ。「僕はいったい誰なのか……」。

こうしたアイデンティティの危機を巡る深刻な問いが、しかし深刻すぎて退屈な考察に陥つてしまわないのは、この小説の巧みなどころ。会社に届いた招待状を手に、不承不承ながら国際作家会議に出席した主人公が、同業者たちの暴露合戦に立ち会い溜飲をさげるエピソードが挟まれたりすることによつて小説は軽快に滑つていく。そこが面白さ。

そしてまたこの小説の巧みで面白いところは、著者性とアイデンティティを巡るこの問い（「僕はいったい誰なのか……」）を増幅し反復するに、クライマックスとなるひとつのエピソード

ドを設ける点だ。依頼されて自由気ままに書いたとあるドイツ人の自伝的小説が、コスタの不在の間に出版されてベストセラーとなるのだ。そのへんの事情を知らぬまま、周辺的なことがらを訊ねるために電話したコスタに、脅迫されることを恐れたドイツ人は予防線を張る。著者性とアイデンティティを剥奪した張本人もまた、その危機を恐れていたということなのだ。こうした一連の事件が『ブダペスト』の分量の上からも内容の上からも半分を占める。

著者性の問題というよりはむしろ、アイデンティティが分裂の危機にさらされるといふ話が小説の残り半分。タイトルのとおり主人公がブダペストに滞在する期間も長いこの小説は、いわば二都物語である。そしてリオとブダペスト（この都市はこの都市で、ブダとペストの二つの都市から成り立つのだが）、遠く隔たった二つの都市でコスタは、同様のようでもあり、まったく裏返しのようなでもある人生を送るといふ次第だ。苗字と名前とが異なる順序で並べられるこの都市で、ゾゼ・コスタという名の外国人として生きることになるのだ。最初は例の作家会議の帰路、飛行機のトラブルにより立ち寄っただけの街として、次には休暇で、三回目はリオでの妻とのトラブルを断ち切るかのよう逃げ込み、そして最後に盛大な拍手に迎えられ、コスタ／コスタはハンガリーの首都を体験する。

妻と意見が合わず、ひとりりでヴァカンスを過ごしにこの街に来たコスタは、ハンガリー語の家庭教師クリスカと関係を持つ。妻と別れてやってきたときにも、強制退去を命じられるまで彼女の家に居候することになる。まるで重婚を生きるまったくの二重生活のようにも見える。当局から強制退去を命じら

れるのは、その直前に習いおぼえたハンガリー語で、ある詩人の新作詩集の代筆をし、直後にその事実を暴露してしまうからだ。リオでと同様ゴーストライターを務め、ゴーストライターとしての職業倫理に反してしまつたから。その点でリオでの生活と同様のことをやつてしまつていように見える。

しかしブダペストでの作家生活がリオでのそれと違うのは、実は彼の代わりにものを書いたのは、彼が代筆した当の詩人その人であつたという点においてなのだ。

ブダペストの文芸クラブ内での仕事を得たコスタの前に、ある日、枯渇した大詩人コチシュ・フェレンツが紙を求めてやつてきた。そこで主人公は彼に真新しいノートを手渡した。

黒檀の机の真向かいに用意された僕の顧客用の席に座つた。ノートを開き、ポケットから古めかしいペンを取り出したが、蓋をとるのにもたもたとしている、手はぶるぶると、まるで血迷いながら宙にでも書くかのように震えている。だが、紙の上にペンを置いたとたん震えは収まり、手は動かなくなつて、単語はひとつも出てこなかつた。詩人の顔を見ると、額の皺には大粒の汗、黄色い歯、笑っているのかと思つたら口は歪んでいた。それから彼の神経は次第に緩み、両肩は落ちて、全身が萎え、ペンは手から滑り落ちた、だらんとした口でコチシュ・フェレンツは言つた。忘れた。(150—151)

大詩人の震える手がペンを握つた瞬間に止まつたのだから、そこから奔流のように言葉があふれ出すのかと期待する私たち読者を見事に裏切り、「忘れた」である！ この関節はずし

の直後、もうひとつの関節はずしを連ねて、コチシュ・フェレンツのゴーストライター、ゾゼ・コッスタの文章を最初に書いたのは、実はコチシュ・フェレンツその人だつたという複雑に逆転した関係性が明示されるのだ。

だが、いいか悪いかは別にして、彼は僕のノートの柿落としをしてくれた。第一ページの上の部分、ちょうどペンが止まつたところに黒い点を残してくれた。そこを起点に僕は詩句を一行書き、もう一行、もう一行と続けた。自分の書いた三行詩を読み、僕は満足した、コチシュが何年も追いつて来なかった単語は、きつとこれらの語に違いない。(151)

こうしてゾゼはコチシュの書きたかつたはずの詩をひとつまたひとつと書いていく。そして三行詩でノートが埋まると、彼は文芸クラブ内のトイレで詩人に黙つてノートを手渡す。それが待ち望まれた大詩人の新作詩集として世に出るのだ。

この著者性の関係の逆転があるからこそ、オビに予告された「やがて漂着する、驚愕のラスト」が成立する。宣伝文句とはいえ「驚愕」は大げさではないかと私は思うのだが、要するに、書いた覚えのないテクストにゾゼ・コッスタの名が冠され、それがベストセラーになるといふ、どんでん返しが待っているという展開だ。タイトルは『ブダペスト』。リオでのエピソードとは正反対の出来事が起こるといふ次第。

ストーリーの結末をこう書いてしまうことを、最近では「ネタバレ」と読んで忌避するものらしいが、なに、このストーリーは本書の最大のセールスポイントではない。そもそも私は白水

社の営業マンでもない。この小説のこの一節で重要なことは、一滴の染みをつけることは既に言葉が発する（書きつける）ことなのだという事実がここに明記されているということだ。染みをつけること、ノートに筆をおろすこと、点をつけ、紙を押しさえつけ、引つ掻くこと。文体 (estilo) とは尖筆 (estilo) であり、書くとは掻くことだという命題がここには見出されるのだ。事実、リオ・デ・ジャネイロでやがてベストセラーとなるドイツ人の自伝小説を書いていたジョゼ・コスタは、「キーボードを引つ掻いていた」(34) と表現している。

ちなみに、芥子色の表紙を持つこのドイツ人の自伝的小説は『ジノグラフィア』というタイトル。普通に考えれば、遺伝子 (ジーン) にもものを書く者、という程度の意味だろうか？ ドイツ人の女性遍歴を綴った小説にこうしたタイトルがついているのだから、書くこと、尖筆で印を刻み込むことの性的な含意もまた充分に意識されていることがわかる。小説『ブダペスト』内にはジョゼ・コスタが執筆途中の『ジノグラフィア』が採録されているのだが、戯画的なまでにこの含意を顕在化させていて面白い。『ジノグラフィア』の主人公「私」は、ブラジルに来て最初に関係を持った女性テレサに「私の目的が彼女の中に本を書くことだけだ」(43 傍点引用者) という理由でふられるのだった。しかし彼の「書く」行為は、その後、評判を呼ぶ。

その後、私は学生を追い回すようになり、ときには彼女たちはブラウスの上に書くことを許してくれ、そのうちに肘の内側にも書かせてくれましたが、そこはくすぐったがりでした、その

後はスカートの中や腿にも書かせてくれました。彼女たちが私の書いたものを同級生に見せびらかすと、それが人気を呼んで、私のマンションにやって来て、顔や首に本を書いてほしいと言いました、その後はブラウスを脱いで、乳房や腹や背中を差し出してくれました。そして、私が書いたものをほかの同級生に見せるのです、そうすると今度はその人たちが私のマンションまでやってきて、パンティを剥ぎ取ってほしいとすがります、こうして私の文字が黒々と、彼女たちのぼら色のお尻に輝くことになりました。女の子たちが私の人生に入っては出てゆきました、そうして私の本はそこら中に散逸し、ひとつひとつの章が方々に散ってゆきました。(44—45 傍点引用者)

これだけのあからさまな性的含意、性的隠喩に説明の必要はないだろう。書くこと、体に印を刻み込むことは、「ぼら色のお尻」に黒い染みをばらまくことにほかならない。本は、文字は、「散逸」し「散って」行くのだ。ブダペストでのジョゼ・コスタは、恋人クリスカの部屋の壁にスパゲティの染みをつけ、それをあたかも自身の存在証明であるかのように気にする。書くことは自身の存在を危機にさらしつつ、自らをばらまいていくことである。私が生きてきた証は、紙の上の染み、壁の染み、他人の体の上や中の染みにこそあるのだ。

ニーチェと女について論じながら『尖筆とエクリチュール』と題する本を書いた人物、「散種」というエクリチュールの性質を論じた人物を、この小説の理論的バックボーンとして措定したい誘惑に駆られるだろうか？ しかし、実際に小説を読むに当たっては、そこまで考える必要もあるまい。これまで引用

した数カ所のような、嬌笑だか微笑だかを誘うパッセージに笑ってあげばいい。

読み終えて本を閉じたら、余韻に浸りながらも一度、芥子色の表紙をぼんやりと眺めて見ることだ。私たちはそこに刻まれた染みのような傷のような、押し痕のような、奇妙な凹みに気づかないではいけない。角度を変えて光を当ててみるとよい…… 本書を開く前の私たちが肝に銘じたように、本を読むにはぼんやりと対象全体を眺めるような注意力が必要なのだ。そうした注意力を持たない者は、芥子色の表紙に刻まれたこの本の本当の著者かもしれない人物の名前に、最後まで気づくこととはないだろう。

(柳原孝敦)